

新晃工業

—二〇一八年を振り返って印象に残ったことをかお話し下さい。

二〇一七年後半から明らかとなった日本の『ものづくり品質の劣化』は収束せず、自動車・部品・化学・化学メーカーなど、次々に不正や偽りの報告は絶えず、非常に印象に残っております。

これは、技術的影響は極めて軽微でも『品質の契約(約束) 破り』であり、企業の信用は失墜します。企業も人も約束を守ること

とが信用につながる事を再認識いたしました。新晃工業は機器メーカーでありこれまで以上『品質担保の重要性』を再認識



し、社内品質システムの確立と改善を強化しております。また、年末には日産自動

車の経営上の問題が発覚、グローバル大企業の経営・利益争いの奥深さを直見するにあり、日本流の仕事のや

—事業環境や御社のビジネスはいかがでしたか。二〇一八年のイメージ

は『乱れ』に揺られていた印象の年となりました。しかし、新晃グループは

象の年となりました。『乱れ』に揺られていた印象の年となりました。しかし、新晃グループは

「新晃工業の味は『技術力』に裏付けられた『競争力』にあると考えております。技術力は空調技術に留まらず『生産供給力・問題解決力・品質力・ソテカ』など多岐にわたります。二〇一九年は新晃グループにおける『総合技術力の強化』に注力してまいります。」

「総合技術力の強化」に注力

執行役員 技術本部第一テックニカルセンター設計部長 佐野 雅一氏

り方だけでは通用しない社会になっっている事を感じました。

持ちました。人手不足を背景に建築工事遅延による納入時期の乱

の思い通りに進まない増波」の中にも適進出来た年でもありました。

「私事になりますが、昨年遺贈を迎えていることも

「私事になりますが、昨年遺贈を迎えていることも

あり『健康第一』を旨とし、昨年まで何とか継続している自転車通勤を今年で継続します。これは、私の中

でもありません。また、そろそろ残り幅を広げる事にもチャレンジする年とします。」

2019年を読む